

大西洋クロマグロ 西大西洋

Atlantic Bluefin Tuna, *Thunnus thynnus*

管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

最近一年間の動き

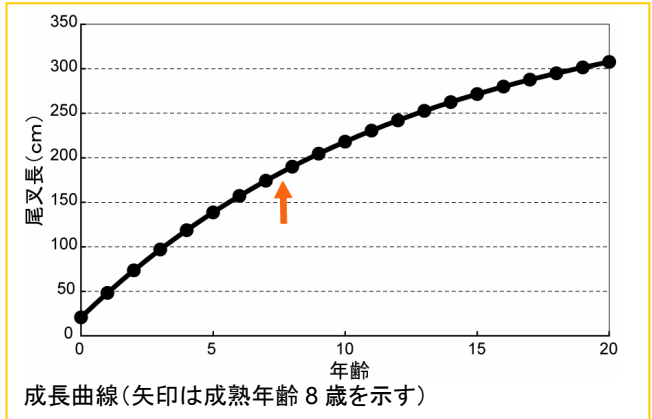
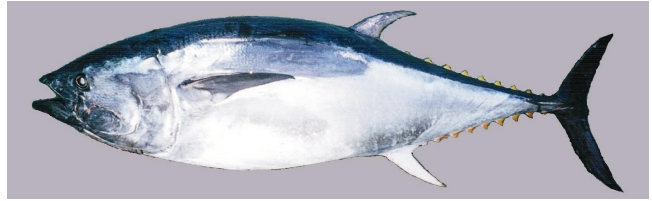
2005年の漁獲量は、1982年の漁獲規制の導入以降で最低水準とされた2004年(2,023トン)をさらに下回る1,826トンとなった。2006年4月のマジョルカ島(スペイン)での第4回クロマグロ管理戦略会議では、産卵親魚の保護を目的とする産卵場での禁漁期・禁漁区、東西系群の混合を考慮した新たな資源管理の枠組みが検討され、6月にはマドリッドで資源評価が行われた。11月の本会議で2008年までのTACが2,100(日本は380.47)トンに決定した。

生物学的特性

- 寿命: 20歳以上
- 成熟開始年齢: 8歳
- 産卵期・産卵場: 5~6月、メキシコ湾
- 索餌場: 北緯35°以北の北大西洋
- 食性: 魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者: まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

漁業の特徴

主な漁業国では、日本ははえ縄のみを、米国は釣りを主体にはえ縄・まき網を、カナダは釣りを主体にはえ縄の操業をする。漁期は日本が11~3月、米国が主に7月~11月、カナダは8~11月である。

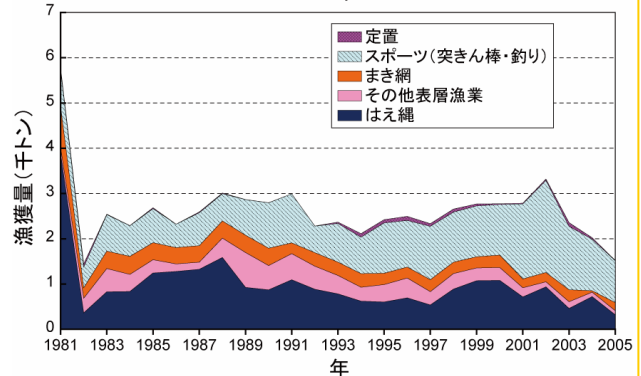
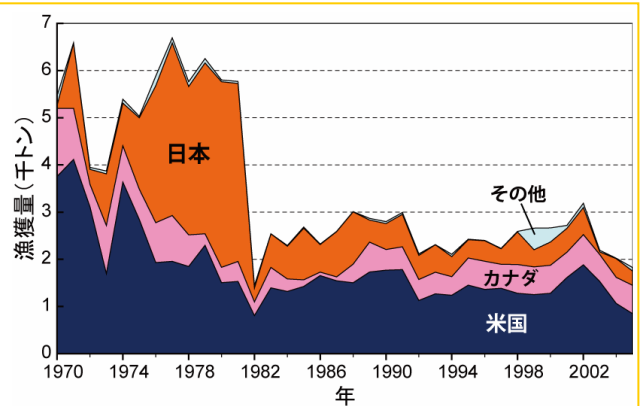


利用・用途

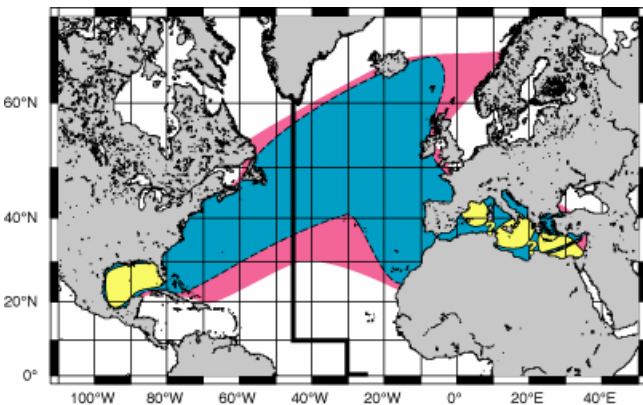
刺身・すしなど

漁獲の動向

漁獲規制により1983年以降ほぼ2,500トン前後となっている。2003年から2006年までのTACは2,700トンで、そのうち日本は478.25トンであった。



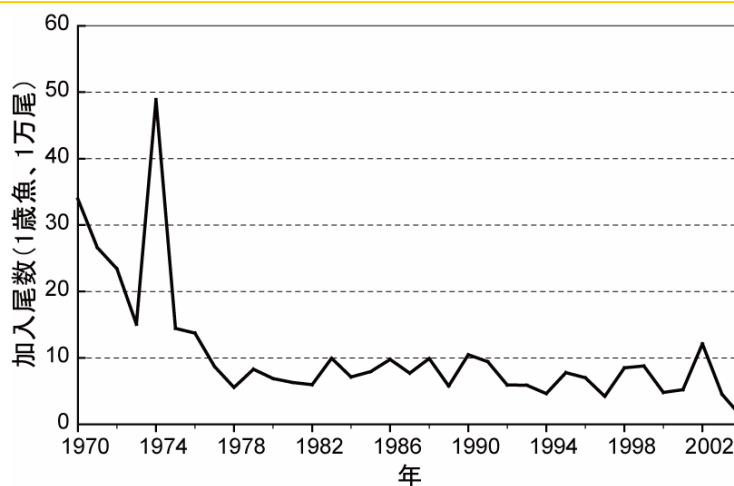
国別(上)及び漁法別(下)漁獲量の経年変化



本種の分布域(赤)と主要漁場(青)、産卵場(黄)
縦太線は系群の東西の区分、索餌場は産卵場を除く分布域

資源状態

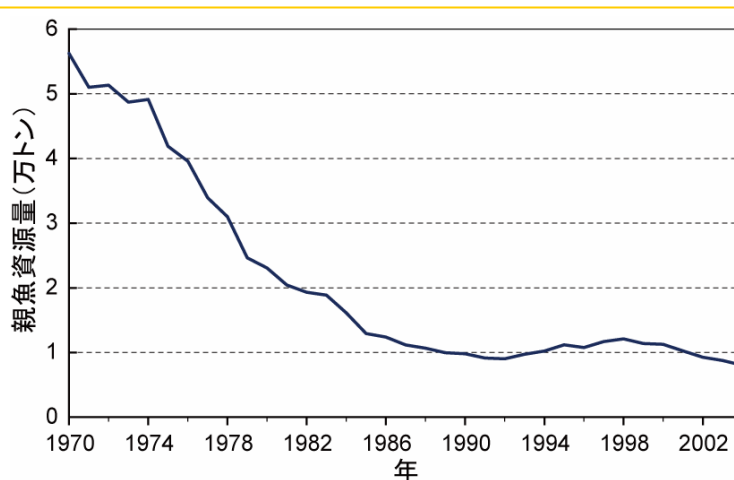
推定された親魚資源量(8歳以上)、加入尾数(1歳魚)を右に示す(ICCATT 2006)。親魚資源量は1970年以降減少を続け、1990年代にいったんその傾向が止まった。しかし、1998年以降わずかに減少傾向が見られ、2005年の親魚資源量は1975年の19%となっている。加入は1976年以降低いレベルで安定している。



加入尾数(1歳魚)の推定結果

管理方策

1998年に、ICCATTは2018年までに50%以上の確率で最適な資源状態に回復させるという計画を決定した。しかし、同科学委員会は2006年の資源評価で、今後のTACを0としない限り最適な資源状態には回復しないことを示した。一方、短期的にはTACを2,300トンにすれば2006年現在の親魚資源量を2009年まで維持でき、2,100トンでは年に約1.5%の親魚資源量の増加が期待できるとした。2006年の年次会合は2007・2008年のTACを、2,100トン(我が国は380.47トン)とした。次回予定の2008年の資源評価により、2009年以降の漁獲割当量を改訂する予定である。他の規制は、115cm(または30kg)未満の漁獲量制限(国別に10%、経済行為禁止)を併せて実施中である。



親魚資源量の推定結果

資源評価まとめ

- 資源評価はICCATTの科学委員会において実施
- 親魚資源量は低位でやや減少傾向
- 加入尾数は低いレベルで安定
- 不確実性は大きく資源水準は不明

大西洋クロマグロ(西大西洋)の資源の現況(要約表)

資源水準	低位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量 (投棄を含む) (2001~2005年)	1.8~3.2千トン 平均:2.4千トン (投棄を含む)
我が国の漁獲 (最近5年)	57~575トン 平均:367トン

資源管理方策まとめ

- 2018年迄に50%以上の確率で最適な状態に回復させる
- ICCATT科学委員会はTACを0にしなければ目標達成は無理と指摘
- 2007年と2008年のTACは2,100トン
- 小型魚漁獲制限